

京都大学	博士 (教育学)	氏名	山口 将典
論文題目	ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向の個人差とそれに関わる要因の検討		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>ヒトは、無生物に対しても内的状態を知覚する心的特性をもつ。社会心理学を中心として、無生物へ内的状態を知覚する特性には個人差が見られることが示されてきた。しかし、こうした心的特性がどのように発達するかについては、いまだ明らかにされていない。本論文ではぬいぐるみや人形といった無生物対象を取り上げ、1) これらに対する心的機能がどのように発達し、2) その過程で個人差がどのように現れるのか、3) そこにはどのような要因が関わっているのかについて実証的に検討した。</p> <p>本論文は、全7章から構成された。</p> <p>第1章では、「内的状態の知覚」を定義し、その研究の意義を論じた。さらに、大型類人猿を対象とした知見を概観し、無生物に対して内的状態を知覚する心的特性はヒト特有なものである点を示した。また、その発達においては、生後初期から心的表象を他者と共有する経験を提供されるヒト特有の養育環境が関与する可能性を指摘した。</p> <p>第2章では、ヒトは無生物に対してどのように内的状態を知覚し始めるのか、その発達過程について概観した。自己推進的に動くか、動物のような形態学的特徴を有しているかの2軸によって無生物を4つの象限に分け、それぞれに関する先行研究を概観した。その結果、いずれの象限でも、無生物に内的状態を知覚する心的機能は生後2歳頃からみられること、そして自己推進的に動かず、動物のような形態学的特徴を有さない無生物(ぬいぐるみや人形)に内的状態を知覚する心的機能の現れには個人差が見られることを示した。</p> <p>第3章では、上記の個人差がどのような要因で説明され得るかを、先行研究に基づいて概観した。その結果、対象となる無生物に対して有する知識やエフェクタンズ動機、社会的動機、他者の証言などが関連する可能性を見出した。</p> <p>第4章では、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する心的機能の発達過程を明らかにするために、0～9歳の子どもを養育中の成人(養育者)を対象として質問紙調査を実施した。ここでは、ぬいぐるみや人形を擬人的に扱う頻度の変化に焦点をあてた。その結果、ぬいぐるみや人形を擬人的に扱う頻度は1歳以降徐々に増加し、4～6、7歳頃にピークを迎え、その後減少した。また、この頻度には個</p>			

人差が見られることも示された。

第5章では、4～6歳の幼児を対象に、ぬいぐるみや人形に対して認知的性質を付与する傾向にどのような社会的要因が関連しているかを実証的に検討した。その結果、幼児のぬいぐるみや人形に対して認知的性質を付与する傾向には個人差がみられ、それは、養育者がぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚しやすい傾向と相関することが示された。

第6章では、成人においても、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する心的機能がみられるかを検討した。154名の大学生および500名の成人を対象として質問紙調査を実施した。その結果、成人期にもぬいぐるみや人形を擬人的に扱っている個人が一定数存在すること、そうした心的機能の個人差は、心的ストレスや孤独感ではなく、過去にぬいぐるみや人形を擬人的に扱った経験があるかどうかにより説明された。

最終章となる第7章では、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する心的機能の発達的变化、およびそれに関わると考えられる要因について、本研究で得た知見を総括した。こうした心的機能の発達には、養育者をはじめとする他者が発達の早期からぬいぐるみや人形に対してどのようにふるまい、どのように話すのかといった社会文化的要因が深く関わっている点が見出された。また、こうした発達早期の経験は、成人期にかけて長期的に影響する可能性を示した。今後の課題として、主観的報告のみならず、多様な指標を適用して内的状態の知覚を可視化するアプローチの必要性をあげた。これにより、無生物に対する内的状態の知覚とその発達に関与する神経学的機序の解明が期待できると思われる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ぬいぐるみや人形といった無生物に対し、ヒトがどのように内的状態を知覚するのか、とくに、そうした心的機能がどのような過程をたどって発達し、また、そこにはどの程度の個人差が生まれるのか、を実証的に明らかにすることを目的としている。

本論文の特色は、以下の3点にまとめられる。

- (1) ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する心的機能の発達的变化について、幼児から成人まで幅広い年齢層を対象として実証検討を行った。具体的には、ぬいぐるみや人形を人格化して扱う行動に注目して、その発達的变化および個人差を詳細に記述した。その結果、成人になってもぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する個人が一定数いることを見出した、この成果は、ある事物に対する理解は、万人において必ずしも一律的に収斂していくわけではない事実を示すものである。
- (2) 無生物に対して内的状態を知覚しようとする心的機能の個人差は、従来、孤独感などの心理学的要因によって説明されてきた。他方、本論文では、生後に養育者をはじめとする他者から受ける証言が密接に関連する点を見出した。これは、発達の早期から受ける経験要因が、無生物に対して内的状態を知覚する心的特性の個人差を創発する可能性を示しており、当該分野に新たな視点を提供する成果であった。
- (3) 養育者をはじめとする他者が、無生物に対してどのようにふるまい、話すかによって、子どもの内的状態の知覚も変化し、それが生涯にわたって影響する可能性を実証的に示した。

第1章では、大型類人猿を対象とした先行研究を概観し、無生物に対する内的状態の知覚という心的機能はヒトに特有なものである可能性を示した。また、そうした心的機能の獲得については、生後初期から心的表象を他者と共有する経験を提示されるヒト特有の養育環境が関与する可能性を指摘した。

第2章では、ヒトがいつ頃から無生物に内的状態を知覚するようになるのかを概観した。生後2年を過ぎる頃から、ヒトは無生物に内的状態を知覚する傾向を示すことを見出した。さらに重要な点として、ぬいぐるみや人形などの無生物に対して内的状態を知覚する心的機能には個人差が存在する点を明らかにした。

第3章では、ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向の個人差に関連する要因について先行研究を概観した。事物に対して有する知識やエフェクタンス動機、社会的動機、そして、他者による証言が、個人差に関連する点を指摘した。

第4章では、0～9歳の子どもがぬいぐるみや人形を日常どのように扱っているかについて養育者を対象とする調査を行った。その結果、ぬいぐるみや人形を擬人的に扱う頻度は1歳以降徐々に増加し、4～6、7歳頃にピークを迎え、その後減少した。また、この頻度には個人差が見られることも示された。

第5章では、4～6歳児を対象に、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する心的特性を詳細に記述した。その結果、養育者がぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚しそれに言及する頻度が、幼児の個人差と関連することを見出した。

第6章では、成人を対象に、ぬいぐるみや人形に内的状態を知覚する心的機能の個人差を記述した。従来指摘されてきたような心的ストレスや孤独感ではなく、過去にぬいぐるみや人形を擬人的に扱った経験が関連することを見出した。

第7章では、上記成果を踏まえ、ぬいぐるみや人形という無生物に対して内的状態を知覚する心的機能の発達と個人差、それに関連する要因を総括した。

無生物に対して内的状態を知覚するヒトの心的機能の個体発生を、社会的要因つまり養育者の日常のふるまいに注目して実証的に検討した点、また、こうした心的機能の個人差は、発達早期の経験が関与し、成人期にいたる長期にわたり影響する可能性を示した点は高く評価できる。これらの成果は、当該分野の新たな展開に寄与するものである。

他方、今後に残された問題として、以下の点が指摘された。

- (1) 学齢期および青年期における無生物に対する内的状態の知覚については本論文では検討されておらず、長期縦断研究などを実施する必要がある。
- (2) 「内的状態の知覚」表現されている心的特性を、その脳神経系基盤をもとに今後詳細に検討する必要がある。
- (3) 無生物に対する内的状態の知覚とその個人差を創発しうる機序を含め、当該分野の発達モデルを提案する必要がある。

しかし、こうした点は、本論文の価値を根本的に減ずるものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降